

ヨーロッパ日本研究協会の設立の頃

ヨーゼフ・クライナー（ドイツ日本研究所）

ヨーロッパ日本研究協会(European Association for Japanese Studies 略してE.A.J.S.)は、平成3年9月ベルリンで第7回国際会議を開催する予定である。また近い将来、その創立20周年記念を迎えるので、ここで将来のために、協会の設立にまつわる裏話やその背景について振り返ってみたいと思う。

ヨーロッパにおける日本研究は長い歴史を持っている。そしてその研究に励んだ先覚者達は、常に互いに密接な連絡を持っていたことを忘れてはならない。例えば、西ヨーロッパや中部ヨーロッパで最初に日本研究を確立したオランダ、ライデン大学のヨハン・ヨーゼフ・ホフマン教授、パリ大学で活躍したレオン・デ・ロニー、そしてヴィーン・オーストリア学士院で日本研究を続けてきたアウグスト・プフィッツマイヤー等は、幕末の頃から互いに文通して資料を提供しあったり研究報告を行っていた。そして、丁度幕府のヨーロッパ使節団がパリに滞在していた頃、第1回目の東洋研究者国際会議に3人とも出席したので、その席上で少なくとも一度は互いに直接話す機会があったと思われる。また、使節団と共にパリを訪れた福沢諭吉にも会って、研究に関する助言を得ることができたであろう。

明治時代に入ってから、今度は日本で新たに日本研究の基礎を確立し始めたお雇い外国人や外交官、宣教師として日本を訪れた研究者も、イギリスのアジアティック・ソサエティー(Asiatic Society)やドイツの

東アジア協会(O.A.G.)で、しばしば会ったりお互いの研究について話合っていた。しかしながら、このような先覚者達が明治末期から大正にかけてヨーロッパに帰国すると同時に、日本やお互いの連絡が取りにくくなり、音信が途絶えるようになった。さらに、二つの大戦の影響の下で、日本の学会やヨーロッパの学会、あるいはヨーロッパで日本研究を行っていた各大学間の情報交換が全く行われなくなってしまったと言ってよい。そして戦後20年ないし30年経ってから、特に若い世代の日本研究者の中から、相互の交流がないことを嘆く声が少しずつ出始め、連絡を取り合うことが非常に大事だと考える研究者が続出するようになった。

例えばイギリスでは、リチャード・ストーリー教授がおられたオックスフォードのサン・アントニーズ・カレッジが中心となり、日本研究の研究者達のよりどころとなった。そしてドイツでは、チュービンゲン大学の若手のフリッツ・オピッツ教授の呼びかけで、若い世代が集まる情報交換の場として、1972年(昭和47)交通の便がよいフランクフルトの近くのリュッセルスハイムのユースホステルに、ドイツのみならず、スイスやオーストリアなどのドイツ語圏の研究者も交えて初めて集まる機会があった。そこでは正式に学会の組織を作るのではなく、ただJapanologentagと名付けて、1年おきに集まって互いに研究報告を行う約束をして別れた。

その同じ年、1972年の秋の紅葉がもっとも美しい頃、日本ペンクラブが主催して世界中の日本研究者数百人を招待し、東京や京都の国際会議場でInternational Conference of Japanese Studiesという国際会議を開催した。筆者もそこに招かれた1人だったが、当時はヴィーン大学に招聘されてその日本研究所の所長に任命されてから丁度1年が経った頃で、

若い3人の助手P. パンツァーさん（現在ボン大学教授）、S. リンハルトさん（現在ウィーン大学教授）、そしてE. パウアーさん（現在マールブルク大学教授）と一緒に出席した。国際会議の期間中は、毎日様々な外国の同僚の研究報告を聞いたり、日本の先生方と話し合うことができた。また、夕方には哲学者の道を散歩したり、居酒屋で杯を酌み交わす日々であったことを今でも楽しく思い出す。

そして最後の総合セッションの日、それは日記には11月20日の月曜日であったと記してあるが、国際会議場で国際交流基金の井上勝先生が壇上に上がって、この度、国際文化振興会が生まれ変って、国際交流基金が新しく設立されることになるという報告をされると同時に、アメリカ国内の Advisory Committee が設立されたことも合わせて発表された。その午後、国際会議場を出る時にヨーロッパから参加された諸先生方の顔を見ると、皆大変なショックを受けたような驚きの表情をしていた。話を聞くと、アメリカが国際交流基金の設立に際してアドバイスをすることができたのは、多分日本のアメリカに対する義理の一つの結果であり、そのことは理解できるが、それに加えてアジアに目を向けると、今度は東南アジアや中国、韓国の日本研究については日本が大いに援助しなければならない状況にあることもよく分かるから、結局ヨーロッパはアジアの二の次になってしまうのではないか。しかもヨーロッパはアメリカほど結束力がなく、互いのことでさえもよく分かっていないのだから、現状では国際交流基金に何一つアドバイスできない状態で、それはやむを得ないことなのだろう、という話を何度も聞かされた。

ホテルに戻るバスの中で、そのことをリンハルトさんに話していると、彼は突然なぜ先生はそういうことを私に話すのか、先生はウィーンからわざわざ旅費をもらって京都に来たのだから、先生には何かをしなければ

ばならない義務があるのではないか、ときっぱり言われた。その時はとても驚いたが、ホテルに戻ってからその夜に行われた京都市長主催のレセプションの席上で、早速多くのヨーロッパから参加された先生方や同僚と連絡を取りながら、その夜宿舎の都ホテルのどこかに席を設けて相談しませんかと提案した。突然のことだったので、ホテル側はいささか困ったらしい。その夜は既に他の予約で一杯で、しかも我々は47人の大人数だったので、個室を用意してもらうことは不可能に近かった。そこで、ホテルのバーの一つのコーナーにイスラエルを含めたヨーロッパ15か国からの研究者が集まって、朝の2時か3時まで大いに議論した。その席に参加した47人の内、特にヨーロッパの日本研究協会のために働いて下さったのは、デンマークのオーロフ・リディン、フランスのベルナール・フランク、ハルトムート・ロータームント、イスラエルのアブラハム・アルトマン、イタリアのアドリアーナ・ボスカロ、ジャンニ・フォーデッラ、ストラミニヨリア・ワロータ、ポーランドのミハイル・メラノヴィッチ、スイスのクロッペンシュタイン、イギリスのパウエルやリチャード・ストーリー、ソ連のゴレグリュッドとポポフ、オーストリアのリンハルトやパウアー、そしてドイツからはローランド・シュナイダーという諸先生方の名前を挙げることができるが、この他にも熱心に討論に参加して下さった方が数多くおられた。

我々が最初に乗り越えなければならなかったのは討論に使う言語の問題だった。若い学者からは日本語を使っても良いという意見が出たが、戦前の日本研究の教育を受けた学者は、日本語の読み書きはできても会話は自信がなく、その代わりに英語を使ったらどうかという提案が出された。それに対して今度はフランスから異が唱えられ、最後にはソ連からロシア語でないと話し合いに加わらないという意見も出されたので、

最終的には英語に落ち着いた。

そして、ヨーロッパにおける日本研究の将来を考える上で、やはりもっと密接な情報交換の場として、3年おきに国際会議を開催する研究協会を設立したらどうかという案が出され、皆の賛同を得た。その結果、当時はまだ冷戦が続いていたので、ヨーロッパで中立を守っているオーストリアから話を持ち掛けるのが良いだろうということで、先ずヴィーン大学からアンケートの形式で今回の会議に参加することができなかった、ヨーロッパに残っている研究者の意見を聞こうということになった。そして、発送した約300通の質問票の内、翌1973年5月までに約3分の1の方から返事をいただいた。その中で特に多かったのは、ドイツ連邦共和国（旧西ドイツ）、イギリス、イタリア、オーストリア、フランス、そしてイスラエルの順であった。その回答の中では、ヨーロッパでもっと密接な情報交換を行うために日本研究の国際協会を設立することが必須であるという意見が大半を占め、その組織は研究者が個人で自由に入会した上で、国単位の間隔的な組織を作らずに、むしろ3年おきに行う選挙で会長や書記などの役員を回り持ちとして自由に運営すべきであるという意見も多かった。

以上のような各国から寄せられた様々な意見を元にして、ストーリー教授が準備して下さった1973年のオックスフォード大学での会議の席上で、会議に出席した全員がE.A.J.S.の設立に加わることになった。初代の会長には当時ロンドン大学S.O.A.S.の日本語の権威であるパトリック・オニール教授が選ばれた。筆者はオニール先生の下で書記を務めることになり、1973年6月にヴィーンでこの協会のBulletin（会報）の第1号を発行する運びとなった。

あれから約20年がたったが、76年のチューリッヒでの国際会議でオニー

ル先生の後任に筆者が会長に選ばれ、今度はオニール先生が書記を務められた。そしてこの体制でフィレンツェでの会議を運営し、協会の規則に従って2人ともその後3度任期を務めた後、役員を退いて今度は顧問としてしばらく協会の運営をそばから見守ることができた。

また76年には、ヨーロッパ日本研究協会が国際交流基金から奨励賞をいただいた。その時、私は偶然にもサバティカルで、薩摩半島の奥地の宮之城町にある江戸時代の山崎郷のお飯屋で17世紀の宗門改帳を整理していたが、東京から電話で奨励賞の授賞式が10月2日に東京で行われるので必ず上京するようにとの連絡を受けた。これはヨーロッパ日本研究協会が設立されてから4年目のことで、我々ヨーロッパの日本研究者にとっては大きな励みになったといっても差し支えないと思う。

国際会議はフィレンツェの後、オランダのデン・ハーグ、パリ、イギリスのダーハムで開催され、そして今年はベルリンと決まっている。会員の数も数百人を超えて、近年では非常に盛んに交流が行われている。また国内組織としては、イギリスで最初に組織されたのを皮切りに、イタリアではイタリア日本研究者協会(ASTUGIA)が組織され、フォスコ・マライニ先生がその会長や名誉会長を務められた。次いでオランダでも組織されたが、ドイツではその後を追って1990年9月によりやくドイツ語圏の日本研究者の集まりの席上で、ヴィーン大学に同じような組織を作ることが決定した。国際会議と並んで、国内の研究者の集まりや各大学でも様々な形のシンポジウムや研究会が頻繁に開催されることになり、20年前と比べると交換される情報量は非常に増大した。これはヨーロッパ日本研究協会の活動の成果の一つと言えるだろう。

そしてもう一つ、今度は学生の教育のレベルでも最近新しい動きが見られるようになった。それはE.C.がヨーロッパを統一するについて、大

学教育は今よりももっと国際的な協力や情報交換が必要と判断され、そのために「ERASMUS」と名付けられたプログラムが実施されることになった。このプログラムの下で、各大学の研究所レベルでお互いのカリキュラムを認めた上で、学生、研究者や教官の交換制度を導入することが約束された。日本研究の分野では、2年前からオランダのライデン大学が中心となっていていわゆるLeiden Group of Japanese Studiesが実現し、それにはロンドン大学のS.O.A.S.、オックスフォード大学、Oxford Polytechnic、パリの現代日本研究所、ペニス大学の日本研究所、ボン大学が参加しているが、近いうちにコペンハーゲンの日本研究所もこの組織に加わることが予定されている。

(1991年5月)